なお私見をはさみ、執筆者に失礼になるが、現代でも世界的にみればまだ消滅していない、人畜共通感染病「狂犬」に関する初期文献である、江戸中期の元文一（一七三六）に刊行された『狂犬咬傷治方』連山 野呂元丈著が本書に収められていないようである。この分野の研究に長年にわたり尽されている方々だけに、うなづけない感じを受けた。出版にはいろいろな事情が伴うものであるが、何かの機会に本書七資料の中に『狂犬咬傷治方』を加えていただきたく願っている（妄言多謝）。

前後するが、全集の初章を飾る、松尾氏執筆の総合解題「近世日本の畜産と獣医術」は、徳川幕府創建時代から出立して、漢方流全盛期を経て蘭方技術の導入されるまでの、わが国獣医界の流れを眺望した三〇ページの労作であり、高く評価される文献である。

なお医史学と獣医史学は、その研究過程に於て、一致する史実が発見される点からも、両者を結ぶ合同研究が、今後ますます進展することを期待する次第である。

（坂本　勇）

〔農山漁村文化協会：東京都港区赤坂七ノ六ノ一　電話〇三―三五八五―一一四五、一九九六年六月発行、A五判函入、六三二頁、定価七、〇〇〇円〕

R・コールダー著／佐久間昭訳『物語・人間の医学史』

本書の原著者は科学ジャーナリストで、米国では高名な方のようである。一九八二年に亡くなったそうであるから、そろそろ没後十五年を数えようとしている。従ってフルネームを知りたいと思い探したが、残念ながら書中に見出せなかったし、コールダーという姓の横文字綴りも不明である。元々、高校生向きの医学史啓蒙書だから、そこまでは不要と云ってしまえばそれまでなのだが……。

原タイトルは、Medicine and Man で、サブタイトルは、The Story of The Art and Science of Healing となっている。

せっかくのヒーリングという言葉が、日本語版の書名に生かせ切れなかったのは、如何なる手ちがいなのであろうか。本の腰巻に、呪術から科学へ、マクロな目でみる《癒しの術》、という文字がおどっている。

本の内容から考えると、むしろこちらの方の文字を利用した訳本タイトルにして貰いたかった。

本文は、次の十二部からなっている。

第1部　イモリの目とカエルの趾
第2部　悪魔、半神半人、医師
第3部　暗黒の千年
第4部　偉大なる進展（I）再び光明を

第5部　偉大なる進展（II）精神の座
第6部　偉大なる進展（III）消化の働き
第7部　偉大なる進展（IV）生体国家
第8部　偉大なる進展（V）微量活性物質
第9部　痛みの征服
第10部　感染症の征服
第11部　残された仕事
第12部　健康な世界の健康な人間

各部のはじめに引用されている文章は、聖書をはじめ、いろいろな本からの抜き書きで少々長いものもあり、西洋人の好む箴言というスタイルにはほど遠い。この様な形は原著者の作風だから仕方のない問題である。

例をあげると、第1部の書き出しは次のごとくである。

〝医学は……僧侶からアンチモンの使い方を、イエズス会士からおこりの治療を、托鉢の修道士から切石術を、兵士から痛風の治療を（中略）習った。

オリヴァー・ウェンデル・ホームズ
『医学エッセイ』ボストン・一八八三〟

そしてその第5項に「兵士」があげられ〝ホームズが書いている兵士とは、トマス・シデナムのことで、彼はイギリス市民戦争の折にクロムウェルの騎兵隊に所属していた。歴史家は彼を「医師に変わった騎兵」と呼んでいる。〟という文章で項がはじまっている。

イギリスの臨床医学の父、シデナムの活躍した時代の医学の特性（場あたり的な治療法）をあげる一方で、シデナムの科学的治療法の開発にふれている。痛風患者に節食と安静、新鮮な空気、乗馬、そして彼は万事にわたる中庸をすすめた。標的は鯨飲であった。その他彼の業蹟として、植物性治療薬の研究からキニーネの新しい性質を認め、貧血における鉄の強壮剤の働きを認識し、梅毒患者の水銀治療法を開発したこと等をあげてある。

西洋医学史が苦手な小生にも、このようなエピソードがちりばめられた歴史は、割と楽に読めると思ったが、原著者の文体にジャーナリスト特有のものがあるようで、そう気楽に読める物語ではなかった。

〝訳者あとがき〟に書かれているように、「原始的呪術などによる病気との対決、次いでいわゆる伝統医学を経て、経験的、直感的な医学が実験的、論理的な近代医学に変り」ゆく二千年以上の「道程におけるいくつもの興味深いエピソード」が数多くもりこまれているばかりでなく、一九六〇年以降の変化を、次の時代の医学への大きなキー・ワードとして示唆している。

内容の夫々は面白いのであるが、タイトルにこだわれば、異色の医学史というべきか。訳者のご苦労を多とする。

（中西　淳朗）

〔平凡社刊：東京都目黒区碑文谷五―一六―一九、電話〇三―五七二一―一二三四、一九九六年三月発刊、四六判、三六八頁、二、九〇〇円〕